

## 賢者に向かない国：18～20世紀ドイツにおける宗教的（東洋）教育

ソルステン・パットベルグ（ペキン大学、中華人民共和国）

本報告は二つの部分からなる。第一部では、18世紀末から20世紀初頭までのドイツ・オリエンタリズムについて手短な紹介を行なう。東洋思想を論じたドイツの知識人は四種類に分類することができる。哲学者（ヘーゲル、ショウペンハウアー、ニーチェなど）、東洋学者（ウェーバー、ミュラー、ヴァンデルニッツなど）、実践家（ノイマン、ダールケ、ツインマーマンなど）、そして援助者（フンボルト、ヴァグナー、ゲーテ、ヘッセなど）で。これら四つのクラスの定義、役割、相互関係についてやや詳しく述べる。

第二部では、ドイツの東洋思想に対する態度を分析し、20世紀のドイツにおける宗教的（東洋）教育についての最近の三つのポストモダン批判を検討する。一つはサードの『オリエンタリズム』（1987）、第二はカマクシ・ムルティの『ドイツのオリエンタリズム』（2001）、そして第三はスーザン・マルジャンの『オリエンタ化されたドイツ』（2001）である。特に論じたいのは、上記四つのクラスが協力した努力にもかかわらず、ドイツは「ドイツ的仏教」を樹立することができなかった—その手段を持ち合わせていなかった—という点である。理由は賢者の不在、より適切には賢者の文化の不在のためである。ドイツはドイツ的ロマン主義や理想主義といった哲学的プロジェクトに寄与する新しい心の鍛錬として、せいぜい「ドイツにおける仏教」を受け容れることしかできなかった。その結果として、現在にいたるまで、ドイツ人の文化的容貌とその宗教的（東洋）教育は相変わらず「賢者に向かない国」のままである。